

# わくわく都民農園小金井 高齢者活躍と地域交流の拠点を目指して

一般社団法人 小金井市観光まちおこし協会 事務局長 千葉 幸二



## 1 はじめに

わくわく都民農園小金井（以下「わくわく農園」）は、東京都が、「生産緑地の 2022 年問題」に向け、都市農地の保全と超高齢社会に向けた高齢者の活躍と地域の多世代交流を進めることができる地域モデルの確立を目指して整備し、（一社）小金井市観光まちおこし協会（以下「まちおこし協会」）が運営する農園で 2022 年 3 月に東京都小金井市に開園しました。

農園には広さ 2,800 m<sup>2</sup>の農地に 5 種類の農園（「シニア農園」、「福祉農園」、「地域農園」、「こども農園」、「共菜園」）と付帯設備（ビニールハウス 1 棟、非常時兼用農業井戸など）、付属施設（地場産野菜の販売と飲食提供を行う販売所）が設置されています（図 1）。開園時間は 9 時～18 時（10 月～3 月は 17 時）、月曜日が定休で年末年始と 2 月は農園更新のため休園します。

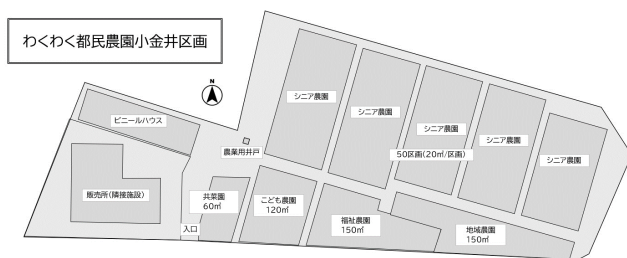


図 1 わくわく都民農園区画図

## 2 事業スキーム

モデル事業を実施するにあたって、東京都、まちおこし協会、小金井市、生産緑地所有者の 4 者で協定を締結し、協働で事業展開することを確認しています。

4 者協定では、まず本事業について、「都市農地の貸借の円滑化に関する法律（以下「円滑化法」）」を活用した生産緑地の借入れのモデル事業として位置付けています。その上で、「1 はじめに」で挙げたシニア農園については、「円滑化法 11 条において重要する特定都市農地貸付け（市民農園開設型）」を、その他の農園については、「円滑化法第 4 条第 1 項規定（自ら耕作型）による認定事業計画」をもとに運営する農園であることを確認しています。その他、4 者それぞれの役割に沿って、土地の賃貸、施設の整備、事業期間等について規定され、本事業の事業スキームとなっています（図 2）。

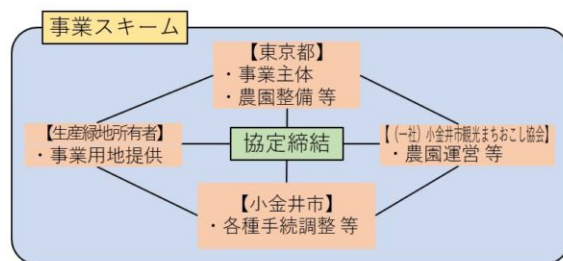


図 2 事業スキーム

## 3 事業内容

わくわく農園で展開している農園、隣接施設について運営内容を紹介します。

### （1）シニア農園

シニア農園は、50 歳以上のシニア層を対象にセミナー形式による野菜栽培の知識・技術の習得が目的の農園で、利用者とまちおこし協会の間で、区画（20 m<sup>2</sup>（2m×10m））の貸借契約（1 年契約（2 回まで更新可））を締結しています。セミナー受講で栽培品目、施肥の時期や方法、農薬に関する知識を学

び、自分で栽培管理が可能になることを目指しています。

利用者は、50 歳以上の東京都民が対象で、定員は 50 人（50 区画）です。利用料は、55,000 円/年で講習料、種苗・肥料・農薬代、農具使用料を含んでいます。

講習は、年間 22 回（水曜日・土曜日に同じ講習を実施するため延べでは 44 回）実施し、講師は地元の若手農家にお願いしています。

利用者の地域別内訳をみると、小金井市内が 30 名、市外 20 名（区部 12 名）となっており、遠いところでは江戸川区や板橋区から通ってくる方がいます。中央線のアクセスの良さが主な要因だと考えられますが、都市農地の活用という観点では、大きなヒントになりそうな気がします。

利用契約終了後のステップが重要となりますが、まちおこし協会では利用者の皆さんに①市民農園の利用、②援農ボランティア、③就農の 3 パターンを基にした具体策の提示が今後の課題としています。



## （２）福祉農園

このところ各地で農業と福祉を結び付ける「農福連携」による試みが行われています。農作業は過酷な環境での作業が多いため、福祉と結び付けることが難しいと考えられてきました。しかし、環境に合わせた作業形態に配慮すれば、障害者事業所や介護事業所の利用者にとって、これまでとは違った支援の提供が可能です。

福祉農園でも、障害者が定期的に農作業講習を受けて、将来就労できる技術を身に着けることを目的

に、地元の障害者就労支援事業所（NPO 法人ぶどうの木）と連携して運営しています。150 ㎡程の広さの農園で、毎週金曜の午前中を作業日として、シニア農園と同様に地元の若手農家が栽培指導に当たっています。

この活動によって、事業所利用の障害者が農作業経験を蓄積し、市内・近隣農家へのスポット就労、定期就労ができる仕組みと関係性を生み出すことが可能になります。今後は、地元の JA 東京むさしや地域包括支援センター、福祉事業所など関係事業所向けの見学会や意見交換会を実施して、福祉農園を起点にした農福連携の地域拡大を図っていきたいと思います。



## （３）地域農園

地域農園は、広さが 150 ㎡程で、地域の見守り団体である「みんなの安心・ささえ愛ネット」（略称「みんな愛ネット」）一商店会、介護事業所、地域包括支援センター、保育園、飲食事業者、町会有志などで構成する地域団体）と連携して運営しています。活動は、毎週日曜日の午後に定期化されていて、「みんな愛ネット」の有志が協働で農作業を行いながら地域・多世代交流を進めています。参加者からは「作業中によもやま話に花を咲かせることで、地域の課題が見えてきたり、解決策をその場で話したりできるので、地域のコミュニティづくりの機会になる」などの好意的な感想が出ています。

わくわく農園の事業目的として、「地域交流・多世代交流」が掲げられていますが、この参加者の感想は、地域農園の運営がこの目的に沿った活動であることを物語っています。今後は、地域農園参加者と



近隣住民との交流事業（農作業の体験交流会や収穫祭等）を企画し、この動きをさらに拡大・深化させていきたいと考えています。



#### （４）こども農園

こども農園は、毎週水曜日の放課後 14 時～18 時で活動しています。利用者は、公募で選定された東京都内の小中学生 16 人です。地区別の内訳は、小金井市内が 14 人、三鷹市、武蔵野市が各 1 名です。小中学生別では、小学生が 15 人、中学生が 1 人で、小学生主体の構成となっています。

利用料は、一人 13,000 円/月で、シニア農園と同様に講習料、種苗・肥料・農薬代、農具使用料を含んでおり、こどもたちの栽培指導もやはり地元若手農家にお願いしています。また、地元で教育事業を展開しているグループ「とをが」と連携して運営し、東京学芸大学の学生がボランティアで参加しています。

こども農園の特長は、農業体験を通じて子供たちに都市農業への関心を深めてもらうことを目的として、種播き（植え付け）から世話、収穫までの野菜の成長に合わせた実体験ができる学びと遊びのプログラムを提供できることです。今後もこの特長のさらなる伸長に向けて、収穫野菜の販売体験など



の提供プログラムの拡充を進めていく考えです。

#### （５）共菜園

共菜園は、近隣の保育園や学校のこどもたちと野菜の播種や苗植え付け、水やり、収穫などの体験を通じて日常的に地域交流が生まれる場所です。今年は、地元の保育園 3 園と連携して幼児の様々な農業体験やイベント等を試行しながら運営しています。

このごろは、各保育園の散歩コースとして毎日のように園児が立ち寄り、他の農園利用者やスタッフとの間で日常的な交流が生まれ、地域の多世代交流の場ともなっています。また、幼児期から畑や野菜に親しむことで、未来の都市農業のファンづくりが進んでいると考えられます。今後は、両親向けの農業体験やワークショップも企画し、親子で楽しんでもらいながら都市農業のファンの拡大を図っていきます。

#### （６）野菜販売・飲食提供（販売所「Plum」）

都市農業の利点として、新鮮な地場野菜が身近で味わえる点が挙げられます。わくわく農園併設の販売所「Plum」でも、福祉農園などの各農園のとれたて野菜を販売しています。また、JA から仕入れた地元産野菜販売の他、この秋には、シニア農園講師の地元若手農家の「顔が見える・つながる」野菜販売も計画しています。

販売所「Plum」では、販売の他に飲食提供も行っています。定休日曜日を除く平日と第 2・4 土曜日にランチとコーヒーなどの飲み物、テイクアウト総菜の販売を中心に営業しています。ランチメニューで使用する野菜は、農園産・地場産の新鮮野菜を使用しています。開園初年度のため営業面ではまだまだ改良の余地がありますが、地元産の新鮮野菜が購入でき味わえるスポットとして、販売所「Plum」を大事に育てていきたいと思っています。



### （７）イベント・ワークショップ

都市農業のもう一つの大きな利点は、都市農地を使った様々な体験事業ができることです。わくわく農園でも、３月の開園から月１回のペースで、地元住民向けのイベントやワークショップを実施しています。

今年６月に行った「西洋野菜（イタリア野菜）を見て知って味わう２時間」では、西洋野菜栽培農家との交流、野菜に関するクイズ、とれたて西洋野菜をその場で刻んでトッピングにしたピザ焼き体験に参加者に楽しんでもらいました。ピザ焼き体験では、参加した子供たちがウチワで煽ぐ形でピザ焼きに参加するなど日頃できない作業が体験できとても好評でした。イベント・ワークショップについては、今後も月１回ペースで開催し、都市農業・農地の多様性をアピールする貴重な機会として活用していく考えです。



### （８）災害対応について

都市農地のもう一つの重要な機能が防災機能です。わくわく農園でもそれに対応して、様々な防災設備が導入されています。

販売所棟は、災害時には建物内のラウンジ、トイレ、キッチンなどが利用できる一時的な滞在場所になります。灌水用に設置した農業用井戸は、災害時には発電機電源に切り替えて、トイレに利用できます。この８月には、販売所棟に太陽光発電・蓄電システムが設置され、災害時の備えがさらに充実しました。今年１０月には、体験型防災イベントを実施することになっています。

## ４ おわりに

都市農地については、これまで農産物の生産場所という捉え方が一般的でしたが、近年、その多様性に注目が集まっており、「いかに都市農地の多様性に対応できるか、活用できるか」がこれからの都市農地（農業）を考える際のポイントになっています。

３月の開園から半年が過ぎたところですが、わくわく農園でも、高齢者の活躍や地域コミュニティづくり、こどもの学びや農福連携の試みなど、都市農地の多様性を考慮した取り組みを行ってきました。また、運営体制についても、都市農地活用に理解のある地域の関係団体・個人に協力を仰ぐ形でモデル事業に相応しい体制づくりに努めています。

これから、シニア農園利用者の卒園後の進路確保など検討しなければならない課題がたくさんありますが、モデル事業としての成果を着実に積み上げることで、わくわく農園を都市農地活用の拠点として育てていきたいと考えています。